

松方幸次郎とその時代

群像編

(15)

海 輪 の 火

題字は  
故松本重治氏

明治二十三年ころの神戸・生田神社前、丁稚時代の金子直吉はこんな街並みの中にいた

高知県吾川郡野川村(現吾川郡吾川村)は、四圍山地の深い山ひだに囲まれた山村である。

金子直吉は、松方幸次郎の誕生より半年遅い一八六六年(慶応二年)六月十三日、村の一角にあったつましい洋服反物店に長男として生まれた。明治維新の混乱期に一家は高知へ出たが、雨もりのひどい四畳半一間の長屋住まいだった。十歳の時、家計を助けるため紙クズ買いを始め、やがて砂糖や茶の商店、乾物店に丁稚(ていぢ)奉公に出、十四歳で質屋の丁稚に移った。

貧しさのために

20歳の金子、神戸へ

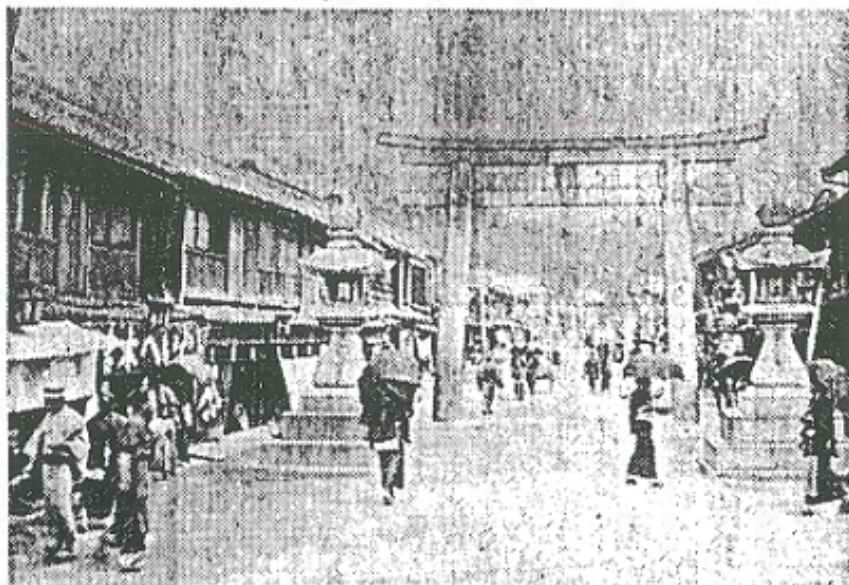
学校へ通えない金子は近所の富司から読み書きを習った。そのため暗唱できるのは高天が原の祝詞(のりと)だけという特異な勉強で、友達から「ばかだ」とまじけり笑わ

この時の金子にとって、視力が落ちることなど大した問題ではなかったのだろう。

一つのことには気が付かず、他のことが目に入ると、他のことが目に入らなくなる。そんな金子にまつわる最も有名なエピソードに二人の話がある。金子が功を遂げた後のことだ。電車に乗って本を眺んでいると女性がお席をあけてくれた。駅でおとをいついてくる。家に入ると、この女性が女房であることに

気が付いた。

丁稚時代もそうだった。金子は玄関先にある廢物なら何でもひっかけた。自分の物も他人の物もない。女物も気にしない。あるものをほいた。



だから、金子が現れるとだれからともなく「直吉だ、廢物だ。」と西洋人を相手に西売を「させ」とまじやま合った。金子は、そんなのめり込みぶりの方をつけた。うすのろかった。

百五巻くような文庫本を背くようになった。そして明治十九年、二十歳になった金子は、質

(敬称略)